

「クリスマス・キャロル」と変身願望

越 川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

イエスはエリコに入り、町を通っておられた。そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

(ルカによる福音書 19章1—10節)

ディケンズと『クリスマス・キャロル』

『クリスマス・キャロル』はチャールズ・ディケンズが1843年に発表した小説で、今でも多くの人に愛されている作品です。クリスマスの期節に、主人公スクルージが自らの生涯を振り返り、最後に善良な人間に生まれ変わるというストーリーです。

物語の冒頭、スクルージがいかに強欲で無慈悲な人間であるかが描き出されます。クリスマスを前に貧しい人々を援助するための募金集めをする人々に対して、スクルージはこう言い放ちます。

「私は監獄や救貧院のために税金を出しています—その税金だって相当なものになってますよ。暮せない奴らはそっちへ行けばいいですよ」

「死にたい奴らは死なせたらいいさ。そうして余計な人口を減らすんだな」。

その晩、スクルージはかつての彼の仕事仲間で、すでに亡くなったマーレイの幻に出会います。マーレイもまた生前は強欲く張りの守銭奴でした。そのために死んだ後も重い鎖に繋がれて苦しみながらさまよい続けているというのです。マーレイはスクルージに向かって言います。

「私が今夜ここへ来たのは、お前さんには、まだ私のような運命から逃れるチャンスと希望があるということを知らせるためなのだ」。

マーレイは、この後で三人の幽霊が現れ、それぞれがスクルージが過去・現在・未来で経験した、そして経験するクリスマスの情景を見せてくれるから、よくよく考えてみるようにと告げて消え去ります。

過去のスクルージ。

幼い時の惨めな経験、少年として働き始めた頃の楽しい思い出、金儲けを第一とするようになった彼に失望して別れていった恋人……。そうしたクリスマスの時期に経験した情景が次々と浮かんで消え、スクルージはかたくなだった心を揺り動かされ、もう一度過去をやり直せないだろうかと思うようになります。

現在のスクルージ。

クリスマスを前に浮かれ騒ぐ町、教会に集う人々、そしてスクルージのところで働いているクラチット一家の貧しいけれども暖かい家族の団らんと幸福、さらには地の底の鉱山で働く労働者たち、荒涼とした海辺の灯台で働く人々、そしてスクルージの甥のフレッドとその妻が迎えようとしているそれぞれのクリスマスの小さな喜び……。

未来のスクルージ。

そこに見たのは彼自身の死体であり、彼の名前が記された墓でした。誰も彼の死を悲しむどころか、「とうとうあの悪魔め、くたばったじゃありませんか、ねえ？」と罵る人物、スクルージの遺したものを分け取りする人々が現れます。

「死んだあとまで品物をとっておきたかったら、なぜ、生きてる時、人なみの暮し方をしなかったんだい。そうすりゃ、死神に見舞われた時だって、だれか世話してくれる者もあったろうから、たった一人でくたばらずに済んだらうにね」

こうした経験をした次の日の朝、スクルージはそれまでの彼とは全く違った人間に生まれ変わります。自ら進んでクリスマスの募金に応じ、病気の子どもを抱えている使用人のクラチットのために給料を上げてやり、さらに今までろくに見向きもしなかった甥夫婦の家にたくさんのプレゼントを持って訪ね、いっしょにクリスマスを祝うのです。

スクルージは「私は心からクリスマスを尊び、一年中その気持ですごすようにいたすつもりです。私は過去、現在、未来の教えの中に生きます」と語り、小説の結びでは、「もし生きている人間でクリスマスの祝い方を知っている者があるとすれば、スクルージこそその人だといつも言われていた」という言葉が記されています。

「良い人」になりたいですか

単純と言えば単純なストーリーであり、ハッピーエンドで終わる分かりやすい物語です。しかしこの物語は発表以来、今日に至るまで多くの人々に愛され、何度も映画化されてきました。

なぜこの物語が愛されるのでしょうか。

その秘密は、この物語が私たちの中にある「変身願望」と言うべきものを単純率直に表しているからではないかと思います。それは「良い人」であることに対する素朴な敬意と、「良い人」になることへの素朴な憧れです。

人間は変わることができる。たとえ何歳になっても。

人間は新しくなることができる。たとえスクルージのような人間でも。

人間は「良い人」になることができる。あなたも、私も。

この単純明快なメッセージが、時代や地域を越えて、『クリスマス・キャロル』を人々に強く訴える作品と

しているのです。

皆さんは「良い人」になりたいと思いますか。

そんなことをまともに聞かれても、恥ずかしくて答えられない、真剣に考えたことがない、友だち同士で話し合うような話題にはならないかもしれません。

私もそろそろ還暦を迎える歳になりましたが、「良い人」になりたいですか、「良い人」になりましょう・・・などということを他人から言われたら、どう答えていいかわかりません。余計なお世話だと思って相手にしないかもしれません。あるいはムツとするかもしれません。

しかし実を言うと、その一方では、誰に言われなくとも、「良い人」になりたいという願いが、どこか私の心の奥底に横たわりつづけているということも事実なのです。

2006年に創立された同志社小学校の校歌は詩人の谷川俊太郎さんが作ってくれたものですが、その一節に「えらい人になるよりもよい人間になりたいな」という言葉が出てきます。この歌詞を最初に見た時、同志社小学校は良い歌を作ってもらったなと感じると同時に、大学生であれ私のような歳の間であれ、誰もがこうした歌が必要なんだろうなと思いました。しかしまた大人になって年齢を重ねれば重ねるほど、そうした願いの実現が難しいことも身にしみて分かってくるということも思いました。

昔々、植木等の歌った流行歌に「分っちゃいるけどやめられねえ」という歌詞がありましたが、人生の経験というのは長い間積み重なってくると、それが習慣となり惰性となって、自分自身の生き方を規定し、拘束し、やがて制限し、抑制するということが起こります。自分自身や人生に対して「たかをくくる」というか、「この程度の自分だから、この程度の人生」という気分になって、さらにまたそういう自分を横から見ている自分があることに気づいて、どうにもこうにもいやになってくる、そんなことが起こります。大人になるということは言い訳やあきらめがうまくなるということなのかもしれません。

ザアカイの「変身願望」

聖書の中にも「変身願望」をもった人間が時々現れてきます。イエスの弟子となったペトロたちは皆そうだったと言えるかもしれません。初期教会の大立て者であるパウロもそうだったかもしれません。これらの人々は皆、何らかのかたちでイエス・キリストと出会い、変わっていった人たちです。今日読んでもらったザアカイという人物もまた同じように、イエスと出会い、変わっていった人のひとりです。

聖書によれば、彼は「徴税人の頭」だったとあります。この仕事は当時のユダヤ人社会では、支配者であり外国人であるローマのためにユダヤ人から税金を集めることであり、徴税人はあたかも民族同胞の裏切り者のようにみなされ、大いに嫌われ、人々から相手にされなかったといえます。さらに徴税人の中には徴収する税金の額を過大に見積もって暴利をむさぼるという「悪い人」も実際にいたようです。

ザアカイが果たしてそういう「悪い人」だったのかどうか分かりません。しかし彼が何らかの意味で「変わりたい」と思っていた人間だったであろうことは、この物語の展開で分かります。彼はなんとかしてイエスの姿を見ようとして、人々から相手にされず、それでも精一杯の知恵を絞って、イエスを一目見るために努力します。そしてイエスを見た彼は、同時にイエスによって見られる存在となり、イエスに呼びかけられ、イエスを自分の家に招くことになります。当時のユダヤ人社会では、誰かを家に招いて食事を共にすることは最高級の親しさを示す行為でした。ここでザアカイに招かれて、その家に行ったということは、イエス

が彼を最高級の友人、仲間として認めたということを意味します。

イエスを迎えた場で、ザアカイは宣言します。

「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」(8節)。

よくある聖書解釈では、ザアカイはそれまで不正な徴税人だったが、ここでイエスに出会って回心したのだ、そしてこのように悔い改めたのだと説明されることがあります。そうだったのかもしれないし、そうでなかったのかもしれませんが。少なくとも聖書のこの部分には、ザアカイが「悪い人」であったとは明確には書かれていないのです。

重要な点は、ここでザアカイが積極的なかたちで、「貧しい人々」あるいは「だれか」に対して自分から関わりをもとうと決意し宣言したことです。

周囲の人々は「徴税人」であるという理由でザアカイを非難し忌避します。相手がそう出るならば、自分も同じようにしてやろうじゃないかと思うのが人情というものでしょう。やられたらやり返せ、です。ザアカイと町の人々の関係が悪かったことは、物語の冒頭からも分かります。

「相手がそう出るならば、自分も同じようにしてやろうじゃないか」。

悪い人間関係がそういう因果応報の連鎖によって生まれてくるとすれば、良い人間関係もまたそういう因果応報の連鎖によって生まれてきます。

イエス・キリストがザアカイの友となったことが、今度はザアカイが今まで心を閉ざしていた人々に心を開き、「わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」という言葉へと繋がっていったのです。

私たちは、このザアカイの言葉の背後に何が横たわっていたのかということを、想像し洞察しなければなりません。彼は何歳ぐらいだったのでしょうか。

聖書はこれも記していません。しかしおそらく若くはなかっただろうと思います。

私たちは、長年同じ町で暮らしながら、人々から敬遠される生活をしてきた彼が何を求めていたのかを、想像し洞察しなければなりません。

おそらく良き人間関係、良き隣人の交わりを求めていたであろうにもかかわらず、実際にはそうではない現実があったのです。

そして私たちは、彼がどういう人間になりたいと思っていたのかを、想像し洞察しなければなりません。

おそらく彼は「良い人」になりたかったのです。おそらくザアカイの心の奥底のどこかに、長い間、「変身願望」が横たわっていたに違いないのです。

その願いを解き放ったのが、ザアカイの友となったイエスです。イエス・キリストがやって来る時、ザアカイは変わります。イエス・キリストはザアカイの「変身願望」をほんの少しだけ、しかし決定的なかたちで押しやることによって彼を変えるのです。

クリスマスが来る時

ザアカイと同じように、スクルージもまた、心のどこか奥底では「良い人」になりたいという願いをもっていたのかもしれませんが。もしそうだとすれば『クリスマス・キャロル』はそんなスクルージが不思議な体験を

することによって、「変身願望」を実現していった物語と読み解くこともできるでしょう。

『クリスマス・キャロル』はクリスマスの期節を舞台とする物語です。そしてクリスマスとは、この世にイエス・キリストがやって来たことを記念する日にほかなりません。

クリスマスがやって来る時、スクルージは「良い人」になります。

イエス・キリストがやって来る時、ザアカイは「良い人」になります。

私のような年齢の人間にとってとくに喜ばしいことは、スクルージもザアカイもいろいろな人生経験を経た人間であり、年配の人間であったと思われることです。ザアカイの物語もスクルージの物語も、人はいくつになっても変わることができるということを教えています。

たとえ若くても歳を重ねていても、「変わりたい」と「変わらない」の狭間で揺れ動く人生の中で、イエス・キリストが来る時、そしてクリスマスが来る時、私たちは新しい自分に向かって、一歩踏み出すチャンスが与えられるのです。

人間は変わることができる。

私たちはやり直すことができる。

すべての人が「良い人」になることができる。

これがクリスマスの伝える福音です。

〔参考文献〕

ディケンズ 村岡花子訳 『クリスマス・キャロル』 新潮文庫 2011年

2017年12月20日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録